

2020年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第二十主日礼拝
「祈りの恵み」ルカ福音書 18:1～14

【聖書】

ルカ福音書 18:1 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。²「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。³ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と書いていた。⁴裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。⁵しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』⁶それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。⁷まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。⁸ 言うておくと、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

9 自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。10「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。11 ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』14 言うておくと、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」



主イエスが話された祈りをテーマとした二つの譬え話、「不正な裁判官とやもめ」、「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」は、別々に読んでも沢山の事を学べます。しかし、続けて読む事によっても、イエス様の御言葉の深さを知る事ができるのだと思います。先週は前半の「不正な裁判官とやもめの譬え話」に聞きました。神は私達を「あなた」と呼び、かけがえのない者として受け止めてくださるお方。それ故に、私達も「我が神よ」と答えて、天地万物を造られた全知全能の神を呼び求め祈る事ができる、祈りによって神とのお付き合い、信

仰が始まり、信仰によって祈りが始まる。だから、神の救いの出来事を思い起こし、神に祈りの叫びをあげよう！私達は神に叫びをあげるように選ばれた者達なのだ、という事を聖書から聞きました。

しかし、先週は大切な事を話していませんでした。主が「不正な裁判官とやもめ」の譬えの最後に仰っている言葉です。「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか」。主が来られる終わりの日まで、地上で信仰を持ち続けていくのは、たやすい事でない、そう主イエスは、心を痛めておられます。だから、18:1の「**気を落とさずに常に祈ること**」に加えて、祈りに大切な事を次の譬え話で弟子達に伝えようとされているのです。この主のみ言葉は無駄にはなりません。イエス様が父なる神の御許に帰られた後、外からの迫害や内部分裂など様々な危機に直面した弟子達と教会は、「祈りについて大切な事」として主が語られたみ言葉を思い起こし、それに従って祈り続けて、なすべき事、なすべきでない事を示され、数々の困難を切り抜けてきました。そしてより一層の恵みを受けたのです。その代表が使徒パウロです。彼らは祈りによって知った新たな恵みを手紙で書き送り、集会や個人の交わりで証しし、次の世代へと伝えます。それが、聖書に収められました。さらに、ルターやカルヴァンなどの宗教改革者達も聖書の言葉に従って祈り続けました。その使徒達と改革者達の祈りは世界を造り変えたのです。2000年間、キリスト者と教会はこのように祈り続けだ。だからこそ私達、今ここでイエス・キリストの父なる神を礼拝する事ができています。「私が再び地上に来る時に、信仰を見出したい」と主が語られた「祈り」についての譬え話から、祈る事の恵みを聴いていきたいと思えます。



先ず、この二つの譬え話には、神を畏れず、人を人とも思わない人物が二人でできます、不正な裁判官とファリサイ人です。ファリサイ人は、一見、神を敬っているようです。しかし、それが表面的であるのは、譬えの中のファリサイ人の祈りを聞けば判ります。彼は神のみ前で、町で見かけた人々の事を思い浮かべていたのかもしれませんが。「私は、あの男のような奪い取る者でもないし、あの女のように姦淫する者でもない、あの者のように不正な者でもない。ましてや、あそこにいる徴税人のような者でもありません。神よ、あなたに感謝します。」と心の中で言います。彼は普段から、「私はあの人とは違う、この人とは違う」と人を裁いていたのだと思えます。普段思ったり考えたりする癖は、祈る時にも変わらないもの。そのように彼は、普段のように、神の御前でも「自分は他の者達とは違う清い者だ」と主張します。その根拠は、自分の行いです。神に対して誇らしげに「私は十分の一献金しています。私は週に二回、断食しています」と、自分の功績を言い募るのです。確かにこのファリサイ人の行い

は、ファリサイ派の中でも熱心であり、なかなか出来る事ではなかったようです。しかし、彼はその行動故に自分は救われるべき清められた者、他の人は滅ぶべき罪人としているのです。ある神学者は、こう言いました。「神は人と取引はされない。『律法を守ったから永遠の命が与えられる、救われる』というのは取引であり、愛ではない。神はそのようには私達を救う事はなさない。」その通りだと思います。神が「私は主、あなたたちの神」と仰って始めてくださった神と私達の間は、損得がらみの取引関係ではない、お互いにかけてあげのない唯一の存在だと認め合う関係です。しかし、自分の功績を並べるこのファリサイ人は、まるで神と取引しているかのようです。

いえ、取引さえもしていないのです。改革者マルティン・ルターは次のように言っています。「いま、あなたがあなたの心を繋ぎ信頼を寄せているもの、それが本当のあなたの神なのである」。「私は」「私は」と重ねて自分の事を述べているこのファリサイ人が最も信頼を寄せているもの、それは「神」ではなく「自分」です。彼は自分を神としている、これこそ、究極の「自惚れ」でしょう。もう一つの譬え話の不正な裁判官もそうだった。本来の裁判は神のもの、しかし、裁判官は神を畏れず信頼しなかった、裁判を自分のものとしており、裁きを歪めていた、だから不正な裁判官だと言われていました。

このように神を神とせず、自分を神とした時、私達は自分の真実の姿を完全に見失うのだと思います。自分が神に造られた被造物であり、神の憐れみがなければ生きていけない…という事を忘れてしまう、神に生かされ、人に助けられてある事を忘れ、自分だけの力で生きているつもりになる。だから、見失うのは自分だけではありません、他の者も見失う。不正な裁判官が、やもめに殴られるのではないかと、と恐れたのも、やもめの姿を見失っていた為ではないでしょうか。腕力ではとても彼に敵わないはずのやもめに、拳で殴られて目に青あざをつくる事を想像し怖気づく裁判官、実に滑稽です。主イエスは、皮肉を込めて、神を見失い自分を見失い回りの人々も見失った者の姿を、裁判官とファリサイ人の姿に映して語っておいでです。

しかし、私達は彼らの事は笑ってばかりもいられない。私達も、何にもまして頼るべき父なるみ神を見失い、自分達を神としようとする傾向を完全にぬぐい去る事は出来ないのですから。私達が生きる世界には、「自分が神さま」、自称神さまがひしめいています。滑稽で、そして悲惨な世界。私達もその中に飲み込まれそうになる事は度々です。だから、イエス様は、自分達が神となるのではなく、自分を低くして、神に叫びを上げて祈り求めなさい、そうすれば、私達は神を神とする事ができる、自分と周囲の人の本当の姿、世界の本当の姿を知る事ができると教えて下さっているのだと思います。それは、祈りの恵みです。



さて、もう一方の登場人物、やもめと徴税人、彼らは二人とも深刻な危機にあり、その中で祈っているという事を見ていきたいと思います。大黒柱である夫を失ったやもめは、社会的にとっても弱い立場。自分が産んだ息子など頼る者がいないやもめで、生活が立ち行かなくなる者も多かったようです。譬えのやもめも、おそらく生活がかかっていた、生きるか死ぬかの瀬戸際だったのでしょう。不正な裁判官に頼み込んででも、裁判をしてもらわなければならないほど、彼女は深刻な危機にあったのだと思います。

一方の徴税人はどうでしょうか。当時の徴税人は、神を信じないローマ帝国の手先となって、同胞のユダヤ人から税金を取り立てていました。それだけでも汚れた存在と非難されるに十分なのに加えて、更に法外な手数料を上乗せして取り立て、自分の懐に入れていましたから、民衆から忌み嫌われていました。徴税人による取立てで、一家離散の憂き目にあった者もいたようなのです。この二つ目の譬えに出て来る徴税人、神さまが禁じていること、貧しい人々の尊厳を踏みにじるような自分の罪に何かのきっかけで目を開かれたのではないでしょう。「なんと自分は罪深い者であったのか」自分の本当の姿に気づいた時、それまで自分がしっかりと立っていた地面にぽっかり穴があき、奈落の底に突き落とされたような思いであったでしょう。「自分は、神に滅ぼされても仕方がない罪人だ」。徴税人が直面した危機は、神さまとの関係における大きな危機だったのです。神と全く関りなく生きて、罪を重ねて、滅びそうになっている自分に気づかされました。

しかし、同時に、この徴税人は、別の事にも気づかされました。「滅ぼす事ができる神は救う事ができるお方だ。このような深い私の罪を赦す事ができるのは天の御神、お一人だけ、神に縋り赦していただくしかない」。徴税人は、無我夢中で神殿へと向かいます。周りの人のことは誰も目に入らなかった、同時に神殿に上っていたファリサイ人にさえ気づかなかった。だから、徴税人は、ファリサイ人とは違って、他人のことは殆ど語らないのです。罪深い自分を悲しみ、胸を打ちながら、ただ一言、「神よ、罪人である私を憐れんでください。」と絞りだすようにして祈るしかなかったのです。先ほど交読文で共に読み交わした詩篇130篇の詩人が「深い淵の底からあなたを呼びます」とあるとおりです。彼は、神様に向けて、絶望の底から悔い改めの叫び、魂の叫びを上げています。

このように、やもめと徴税人の姿を見てみると、危機の時こそ私達の本当の姿が明らかになるのだとしみじみ思わされます。日頃、私達が自分のものだと思っている財産、知識、能力、人間性、健康、周囲の人々との良い関係などなど。私達、それらに頼って生きて行こうとします、誰でもそうでしょう。しかし、危機の時、私達が頼ろうとするものは、脆くもなくなっている事に気づきます。財産も知識も人間性までも、健康や人間関係だって、いざとなったら、なんの力ももたなくなります。そういう絶体絶命の危機の中に現れてくるのは、むき出

しの弱い自分。その時、私達は、何も神のみ前に誇るものなど持っていなかった、神と取引できるようなものなど人間にはない事に気づかされるのだと思います。自分に絶望するしかない、本当の希望が置けるのは、神しかないのです。そんな絶対的な危機などそうそうない、と考える方もいるかもしれませんが。しかし、一生のうちに少なくとも何回か、私達はこのような危機を迎えるのだと思います。この危機をどう乗り越えるか、いや、神によってどう乗り越えさせていただけるかによって、人生は大きく変わるのだと思います。詩篇23篇「**死の陰の谷を行く時も、私は災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる**」と詩人が歌っている通りだと思います。ですから、私達を襲う危機は、決して悪いことではなく、却って、主イエスにあっては、よいことなのだと思います。私達は、危機の時こそ、真剣に天の御神を呼び求め叫ぶ事ができる、祈る事ができるからです。危機の時こそ、まことの祈りを献げ、共にいてくださる神の恵みを受け取る時です。



では、やもめと徴税人は何を神に求めて祈り叫んでいるのかを見ていきたいと思います。一見、やもめと徴税人が求めているものは違います。やもめの場合は、正義を求めている。人を社会的身分で判断し審きを歪めるような事はせず、却って弱い立場のやもめや孤児にも十分に配慮する神の正義を求め、裁判を開くように懇願しているのです。彼女は神の正義を求めています。一方、徴税人は罪人である自分に神の憐れみを求めています。神様、滅ぼさないでください、どうか私の罪を赦してください、詩篇130篇の作者が「**赦しはあなたのもとにある**」と宣言するように、神の憐れみに縋り、赦しを願ったのです。彼は罪を赦す神の愛を求めています。

さて、私達は先ほど、讚美歌262番「十字架のもとぞ」を共に賛美しました。「**十字架のもとぞいとやすけき。神の義と愛のあえる所**」が出だしです。これは前にも説教で紹介しましたが、私がこの歌詞を初めて知った時、「本当にその通りだ！義なる神の罪の審きと、人間を赦そうとする神の愛が交わった所に、イエス様の十字架は立てられた。」と感動しました。ところが私が尊敬する神学者が「262番の出だしの歌詞は不正確だ。主イエスの十字架より以前、神の義と愛は、別々だったの？」と言っているのを聞きました。考えてみれば確かにそうです。旧約聖書を読めば分かりますが、天のみ神の正義は、ご自身に背く私達人間を切り捨てる正義ではない、何とかして救おうとする愛溢れる正義です。また、神の愛は、私達が間違っただけでもそれを見逃す、甘やかしてダメにする偽りの愛ではないのです。寧ろ、私達を真剣に深く愛するが故に、正しく罰する義なる愛と言えるのです。神こそ、義なる愛、愛なる義の

お方であると聖書全体が証しています。その神を最もよく、最もよく表しているのが十字架と復活の主イエス・キリストです。裁かざるを得ない神の義と滅ぼさずに赦したい神の愛、それが主イエスのお姿に結実しているのだと思います。ですから、やもめも徴税人も、神の義なる愛、愛なる義、その結実であるキリスト・イエスを求めて祈っていると言えるのです。自分には財力も人脈も信用もなにもない。ただ神の愛なる義の裁きに縋るしかない…というやもめ。自分はとり返しのつかない罪を犯した、滅びるしかない、この罪を赦せるのは、義なる愛の神以外にはない、と胸を打って自分の罪を悲しみ悔やみ神の前にくずおれる徴税人。それぞれの危機にあって、自分を空しくして神を呼び叫ぶ、不思議な言い方ですが、呼び求め叫ぶ時、私達は天の御神が私達の事を正しく愛して下さる事に気づかされる、父なるお方が祈る私達を大きく抱擁して下さる事に気づかされる、そして神の義と愛を、より深く知ることができるのだと思います。改革者ルターは、「試練は神の抱擁」と言っているそうです。その言葉を次のように言い換える事は許されると思います。「試練の時こそ祈りの時、祈りこそ神の抱擁、祈りは神を知る時」。愛と義の神をより深く知る、これこそ、祈りの恵みです。そうして私達は、信仰者として整えられていきます。勿論、それは私達の力ではありません。父なる神と御子・イエスキリスト、御霊なる神の力です。だから、私達は自分自身の信仰を誇るのではなく、神を讃え賛美するのです。



しかし、私達が経験する危機は、やもめや徴税人のような、ある意味分かりやすい危機だけではありません。もっとたちの悪い危機があります。それは、人間が危機にあるとは思わない、全てがうまくいっている順調な時です。私達は、どんな時に神を忘れてしまうのでしょうか。やもめや徴税人のように逆境にある時もそうかもしれませんが、物事がうまく運んでいる時の方が、神を忘れてしまう事が多いのではないかと思います。何事もうまくいっていると、私達はそれが自分達の手で成し遂げたと錯覚し、神がいなくても自分達だけでやっていける、と勘違いしてしまいがちです。これは、最も性質(たち)の悪い危機だと思います。だから、二つの譬えの登場人物の中で本当の危機にあるのは、自分の行いを誇るファリサイ人ではないでしょうか。

私達は弱い者です。逆境にある時は、「神などいるだろうか」と疑いを抱く、そして、全てが順調な時は、「神などいなくてもやっていける」と驕り高ぶる。この地上には、私達を神から引き離そうとする力が強く働いています。聖書では、私達人間を神から引き離そうとする力を、悪魔、サタンと呼びます。サタンから誘惑を受け、神から離れて行こうとする私達、サタンに対抗するには主イエスから教えて頂いたように祈る事で、神に守られ、助けを受けていくしかありませ

ん。祈りこそ、神からの光の武具を受け取り、それを身にまとう事だと思いません。

ですが、「主イエスの仰るように“気を落とさず絶えず祈る”“遜って祈る”とか、そんな堅苦しそうな生活のどこに平安があるのか？」思うかもしれません。実はかつての私もそう思っていました。祈ることが少ない者でした。恵まれる事も少ない者でした。しかし、色んなピンチを迎えて、神に祈らざるを得なくなりました。なりふり構わず祈らねばならない危機を経験して分かりました。神の御前に自分を空しくして祈る事は、堅苦しい事でも何でもなく、父なる神に愛されている本当の自分でいられる、実に平安な時だと気づかされました。しかも、それだけではありません、天の父なる神は、祈りを通じて、大きな喜びを与えて下さるのだとも教えられました。私達が自分を空しくして祈る事を、父なる神が、キリストが、天の聖なる者達が、本当に喜んでくださるのです。心から愛してくださっている私達から祈りが届くのですから。そして祈りを通じて、愛する者との交わりを喜ぶ天の喜びが私達の内に注ぎ込まれ、満ち溢れ出るまでになります。自分の業を喜ぶ人間の喜びは儂いものです、状況が変われば消え去る喜びです。しかし、天の喜びは、たとえ死に向かう危機にあろうとも、滅びる事なく私達の内に注がれ続けます。祈ることによって知る天の喜びこそ、祈りの恵みであり、この喜びが私達を悪いものから守ります。日常生活で、傲慢になったり卑屈になって、人を憎み嫉み、様々な過ちを犯して神からどんどん離れていくという危険を避ける事ができるのです。長い歲月、神と共にあって祈りを重ねて来たキリスト者の中には、「この人自身が神への祈りのようだ」と感じさせる方がいます。その人の存在が祈りの中にあり、その人の中にも神への祈りが響いているような人。そんな祈りの人となって神のもとへと戻っていければと願います。このようにして被造物である私達に祈りの恵みを注ぎ続け、終わりの日まで導いて下さる主イエスと父なる神、御霊なる神に深く感謝し、御名を崇めます。